

## 5. 前回までのあらすじ



「海岸でポーカーをする水兵四名」(長崎歴史文化博物館蔵)

本コラムでは過去二回にわたり、長崎県生まれの実業家である梅屋庄吉が香港で経営していた写真館について、国内外のさまざまな史料に基づいて議論を重ねてきました。

梅屋写真館について調査することの意義は、梅屋庄吉が孫文に物心両面での支援を約束した時の、梅屋側の状況を明らかにできる点にあります。辛亥革命が孫文をはじめとする中国人の力だけでなく様々な外国人の支援によって成し遂げられたことは広く知られていますが、その支援者の経済的な実態について論じたものは決して多くはありません。本コラムは、梅屋庄吉を例として、この研究状況の一助となることを望むものです。

さて、梅屋写真館の経営規模については、過去二回の調査により、1901年(明治34)には当時の一流企業である横浜正金銀行(のちの東京銀行、現・三菱東京UFJ銀行)や日本郵船株式会社と並ぶほどの構成人員を抱えるほどに成長し、1930年(昭和5)ごろに閉店したことがわかりました。

また住所についても、1920年(大正9)の時点で当時の香港のクイーンズロード・セントラル8号にあり、1925年(大正14)前後を境に同38,40号に移転していたこともわかりました。

このように、20世紀以降の梅屋写真館の経営状況については多少の事実を確認することができました。しかし、それ以前については、まだ十分に明らかになってはいません。そ

の最大の理由は、当時の日本外務省が在外邦人の経済活動の実態を把握し始めたのが日露戦争以後であり、またその調査の対象となったのは資本金一万円以上の企業に限られていたからです。従って、日本の公文書史料に依拠する限り、19世紀中の梅屋写真館の経営状況を明らかにするのは極めて困難と言えます。

そこで今回は、それ以外の資料、たとえば当時の新聞広告や梅屋の作品などを用いて検討を加えてみたいと思います。

## 6. 梅屋写真館の住所

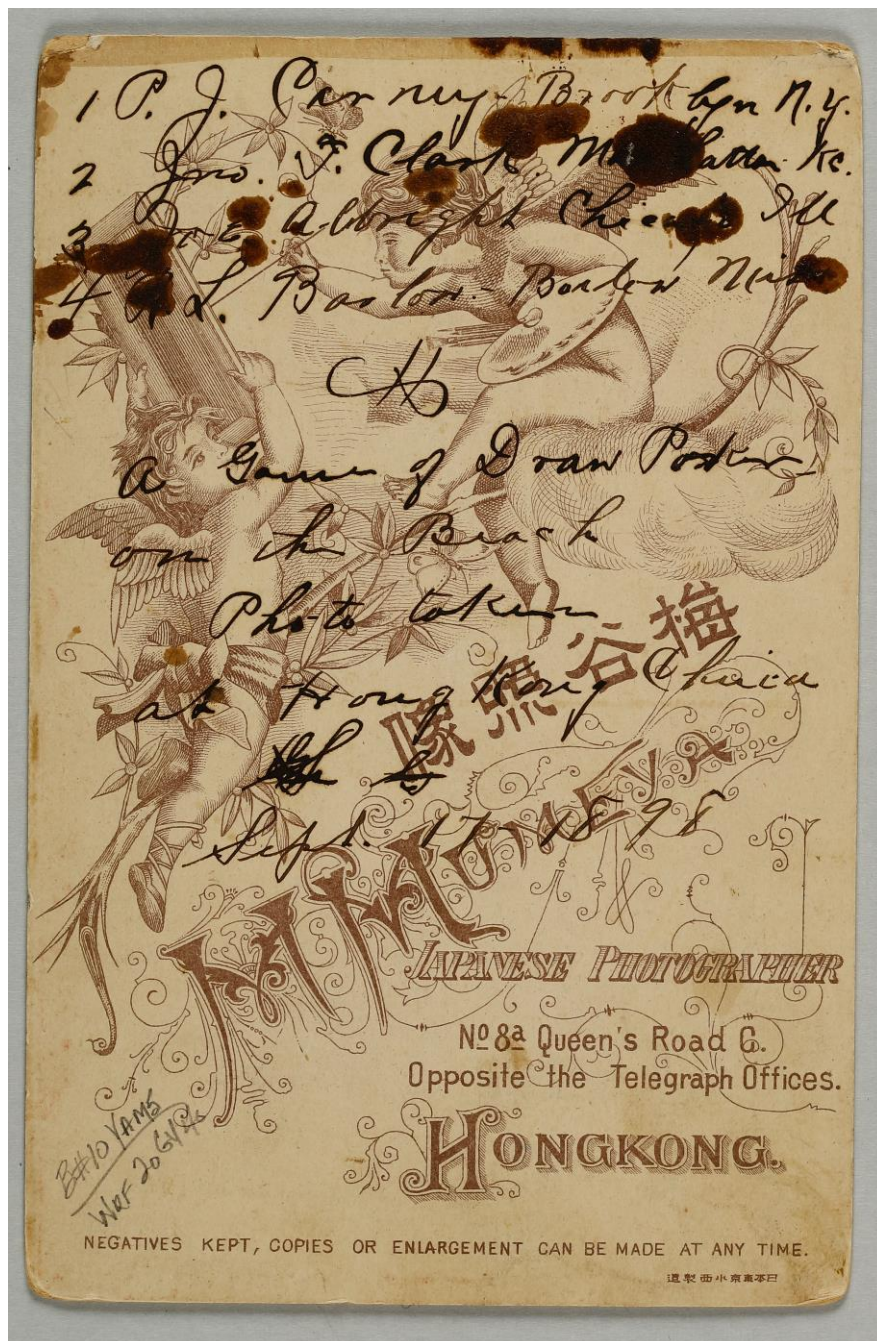
当時の新聞広告には、企業名はじめ、住所と、広告の掲載を申請した日付が記載されています。ここから、梅屋写真館の設立時の状況を特定することが可能です。

筆者が確認しうる限り新聞広告中で最古のものは、*The China Mail*紙1899年(明治32)10月7日のものです。梅屋写真館は、遅くともこの時点で、クイーンズロード・セントラル8A号で営業を始めていたことがわかります。



“Intimate” *The China Mail*, Oct.7, 1899.

更に古いものでは、梅屋が撮影した写真があります(冒頭画像参照)。画像右端に「No.8A QUEEN'S ROAD C」とあり、裏面には、「香港の浜辺でポーカーをした。1898年9月17日(筆者訳)」とあります。このことから、その日には梅屋写真館が8A号にあったことがわかります。



「海岸でポーカーをする水兵四名」裏面(長崎歴史文化博物館蔵)

梅屋自身がのこした記録としては、『永代日記』中の「孫文 二十八年三月十三日 香港中環大馬路第八号 英国人ガンドリー」という一節があります。ガンドリーとは、梅屋に孫文を紹介したイギリス人宣教師・医学博士ジェームス・カントリーのことでしょう。この記述から、梅屋と孫文は1895年(明治28)3月13日、香港クイーンズロード・セントラル8号(おそらく8A号の略記)で出会ったということが、また梅屋写真館の営業開始時期もこのころ以前であることが推測されます。

今回は、梅屋写真館があった8Aがどのような地所であったのか、その不動産価値などから分析を加えたいと思います。

**参考文献**

小坂文乃『革命をプロデュースした日本人』（講談社、2009年）

外務省通商局編『海外日本実業者の調査 第1巻 明治36年～大正元年』（不二出版、2006年版）

島津長次郎氏編『支那在留邦人人名録』（金風社、1917年）

「海岸でポーカーをする水兵四名」（長崎歴史文化博物館蔵）

“Intimate” *The China Mail*, Oct.7, 1899.